

主立った治水家 (古代～近世)

※ここでの「治水家」とは洪水防御のみならず、広い意味で水を治めるのに功があった人物をいう。プロデューサーであるか現場技術者であるかは区別していない。そのような人物は多数存在したと思われるが、ここではその一部だけを掲載している。

行基 ぎょうき (668-749)

和泉、摂津を中心に活躍。大阪・伊丹市の混陽池(こやいけ)は行基がつくった溜め池といわれる。

空海 くわい (774-835)

讃岐(香川県)生まれ。仲多度郡の満濃池が有名。

武田信玄 たけだ しんげん (1521-1573)

釜無川、笛吹川の治水で、信玄堤、万力林などが今も残る。

佐々成政 ささなりまさ (1536-1588)

尾張(愛知県)に生まれ、織田信長の属将となる。1580年、越中(富山県)に入国し、常願寺川に佐々堤(雁行堤)をつくったり、支川を鷲川(いたちがわ)と名づけ、兩岸に堤防を築き、流域を開発した。

豊臣秀吉 とよとみひでよし (1536-1598)

淀川の文祿堤や大阪の太閤下水(背割り下水)。

伊奈忠次 いなただつぐ (1550-1610)

三河(愛知県)に生まれる。徳川幕府の財政確立に貢献した。関東の治水・灌漑事業に腕を奮い、忠治、忠克と伊奈家3代で利根川の付け替えなどを行った。

角倉了以 すみのくらりょうい (1554-1614)

京都の保津川、高瀬川、富士川の疎通など、息子の素庵とともに活躍した。

成富兵庫茂安 なりどみひょうご しげやす (1560-1634)

肥前(佐賀県)生まれ。佐賀の治水に力を尽くし「水の神様」といわれた。佐賀藩主、鍋島氏に仕え、文祿の役に参加、加藤清正の熊本城築城や家康の江戸市街修理などに参加した。

加藤清正 かとう きよまさ (1562-1611)

1588年に熊本城に入城。洪水を起こしていた菊池川、白川、緑川、球磨川の治水工事と新田開発を行ない、米の収穫高を25年間で3割増やした。清正を助けたのが普請奉行の飯田覚兵衛や、佐々成政に仕えていた大木土佐。また、滋賀県の石工集団・穴太衆(あのはしゆう)も肥後の治水に力を発揮した。

川村孫兵衛重吉 かわむらまごべしげよし (1575-1648)

長州(山口県)萩に生まれ、毛利氏に仕える。関ヶ原の戦後、伊達政宗の家臣となる。現在も残る貞山堀(ていざんぼり)の開鑿や北上川改修を行ない、氾濫を防ぎ新田開発を行なった。

西嶋八兵衛 にしじま はちべえ (1596-1680)

遠江国(静岡県)浜松に生まれる。伊勢の藤堂高虎に仕えた。関ヶ原の戦い後、讃岐(香川県)の生駒藩に乞われ、客臣として生駒藩普請奉行となった。当時満濃池は破れ、四半世紀にわたり放置されていた。それを3年で再整備。さらに新田開発や湿地改良を行ない「讃岐の禹王(うおう)」と称えられた。

野中兼山 のなか けんざん (1615-1663)

播州(兵庫県)姫路に生まれる。叔父の養子として土佐藩に入り、二代目藩主山内忠義の命で家老を任される。物部川の山田堰をはじめ、仁淀川などにも多くの堰をつくり新田開発を進めた。また、現在も高知県須賀町に残る手結(てい)港をつくった。これは日本最古の堀込み式港といわれている。

河村瑞軒 かわむらざいけん (1617-99)

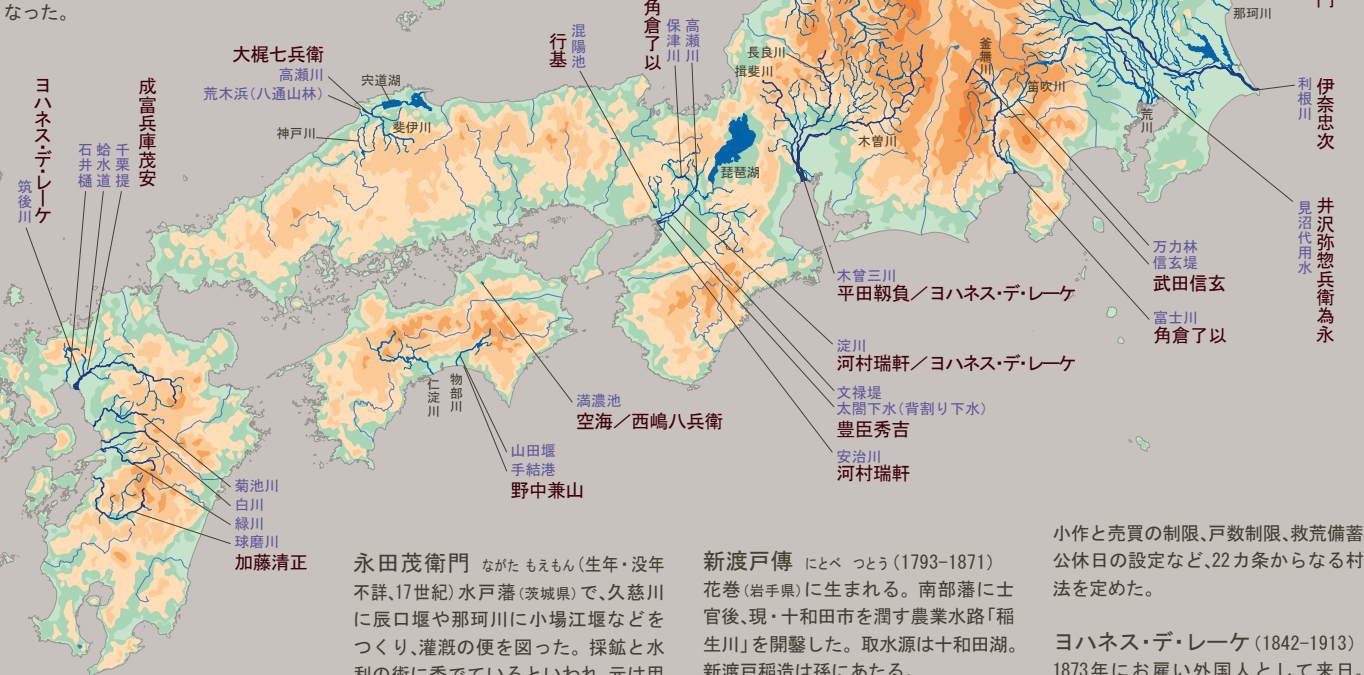
伊勢生まれ。淀川諸流路の整備、安治川開鑿。

板屋兵四郎 いたや へいしろう (出生・没年不詳)

加賀百万石の城下町・金沢に、1632年辰巳用水をつくった。測量、逆サイホン方式、水トンネル開鑿、木管の技術に通じていたという。

大堀七兵衛 おおほし ちちべえ (1621-1689)

出雲(島根県)の豪農の家に生まれる。日本海に面した荒木浜を耕地にするために、防風林を植え、後に八通山林(やおりさんりん)と呼ばれた。さらに斐伊川から水を引き(高瀬川)、荒木浜にさまざまな恩恵をもたらした。



井沢弥惣兵衛為永 いざわ やすべえのなが (1663-1738)

紀州(和歌山県)生まれ。紀州藩で土木・治水に力を発揮する。八代将軍徳川吉宗が江戸に呼び寄せた。見沼溜井(現・埼玉県の沼田)の新田開発を目的に、利根川を水源に見沼代用水を開鑿した。

永田茂衛門 ながた もえもん (生年・没年不詳、17世紀)

水戸藩(茨城県)で、久慈川に辰口堰や那珂川に小場江堰などをづくり、灌漑の便を図った。探鉱と水利の術に秀でているといわれ、元は甲斐の出身といわれている。

平田鞠負 ひらた ゆきえ (1704-1755)

薩摩(鹿児島県)に生まれる。薩摩藩家老として、木曾三川の分離(宝暦治水)を御手伝普請として成し遂げた。工事完成後自刃。薩摩藩士が植えた松は、千本松原となって現在も残っている。

新渡戸傳 にべと べとう (1793-1871)

花巻(岩手県)に生まれる。南部藩に士官後、現・十和田市を潤す農業水路「福生川」を開鑿した。取水源は十和田湖。新渡戸稲造は孫にあたる。

渡部斧松 わたなべ べのおまつ (1793-1856)

秋田藩の足軽の子として生まれる。男鹿半島の寒風山山麓に広がる「鳥居長根」と呼ばれる原野を、滝野頭湧水から導水し開鑿した。そこへの入植者を募り、新村を「渡部村」命名し、共存共栄、相互扶助の精神を柱に、田畑の

小作と売買の制限、戸数制限、救荒備蓄、公休日の設定など、22カ条からなる村法を定めた。

ヨハネス・デ・レーケ (1842-1913) 1873年にお雇い外国人として来日。かかわった事業は、淀川、木曾三川、筑後川、等多数に及び、日本滞在は30年に及んだ。

参考文献：松浦茂樹『国土づくりの礎』(鹿島出版会 1997)／緒方英樹『人物で知る日本の国土史』(オーム社 2007)／「水土を拓いた人びと」編集委員会・(社)農学土木学会編『水土を拓いた人びと』(農山漁村文化協会 1999)